

学ぶ力を育成する「やりくり」授業の実践

福田 仁

鳥取大学附属中学校 社会科

E-mail: fukutaht@tottori-u.ac.jp

FUKUTA Hitoshi(Tottori University Junior High School): Practical of “YARIKURI” classes to nurture ability to learn.

要旨 - 「思考力」、「判断力」、「表現力」を育むために、他者との関わりを持たせ、学びを深める場面を多く取り入れたり、問いや学習課題に生徒に身近な事柄を取り入れたりしながら、「やりくり」授業を実践した。授業後に、社会科に対する意識や他者との関わりや社会科で大切な力に関する質問紙調査を行った。その結果、協働的な学びが社会科に対する意識の向上に有効であり、「思考力」、「判断力」、「表現力」が社会科で大事であるという認識が生徒に生まれたことが示された。

キーワード 「やりくり」授業、学ぶ力、非定型問題、協働的な学び

Abstract — In order to nurture the “thinking ability”, “judgement ability” and “expressive ability” the “YARIKURI” classes was implemented by having the students interact with others, incorporating many situations to deepen their learning, and incorporating familiar matters to the students in the questions and learning tasks. After the class we conducted a questionnaire survey on the students’ awareness of social studies, their relationships with others, and the important skills in social studies. The results showed the cooperative learning was effective in raising students’ awareness of social studies, and that students recognized the importance of “thinking ability”, “judgement ability” and “expressive ability” in social studies.

Key words — “YARIKURI” classes, ability to learn, atypical questions, collaborative learning

1. はじめに

鳥取大学附属中学校は2019年度から2022年度は「学ぶ力を育む『やりくり』授業の開発」、2023年度からは「ともに広げ、ともに深める『やりくり』授業の設計」を研究主題に研究を進めてきた。これを受け、鳥取大学附属中学校社会科では、学ぶ力をこれまでの学習に取り組む姿やアンケート結果などから、「思考力・判断力・表現力」、「自己調整力」とし、そして、他者と関わり、自分ごととして課題に向き合いながら、知識を獲得し、思考を深めることに関しての研究を進めている。

ここ数年、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来や新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」をむかえることとなった。

平成29年に告示された中学校学習指導要領においては、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の

概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められていると示されている。また、すべての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理されている。3つの柱に沿った資質・能力を育成するためには、生徒が課題を追究したり解決したりする活動の一層の充実が求められる。それらはいずれも「知識及び技能」を習得・活用して思考・判断・表現しながら課題を解決する一連の学習過程において効果的に育成され则认为られるからであると示されている(文部科学省, 2018)。

また、令和3年の中央教育審議会の「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」の答申では、急激に変化する時代の中で一人一人の児童生徒が、自分

1. 社会科は得意だ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
4.5%	18.9%	32.6%	27.3%	8.3%	8.3%

2. 社会のテストで記述式の問題は得意だ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
1.5%	12.9%	26.5%	39.4%	15.2%	4.5%

3. 自分の考えを文章で表現することが好きだ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
9.1%	29.5%	24.2%	28.0%	7.6%	1.5%

4. 自分の判断を求められる問いや学習課題に対して、答えることが好きだ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
17.4%	28.0%	29.5%	20.5%	3.8%	0.8%

5. 正解のない問いや正解が1つでない問いに対して答えることが好きだ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
17.4%	24.2%	31.8%	16.7%	6.8%	3.0%

6. 社会の授業においてグループで話し合う活動が好きだ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
28.8%	42.4%	21.2%	6.1%	0.8%	0.8%

7. グループで自分の考えを発表することができる

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
28.8%	42.4%	22.7%	4.5%	0.8%	0.8%

8. 他者の考えを聞いて、自分の考えの参考にすることができる

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
34.8%	51.5%	12.9%	0.0%	0.0%	0.8%

9. 他者と討議などをして、考えたり、答えを導き出したりすることが好きだ

非常に あてはまる	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	まったく あてはまらない
23.5%	34.8%	43.1%	4.5%	1.5%	1.5%

図1 生徒アンケート

のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働

しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることの必要性が示された。

つまり、習得した知識を活用し、社会的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら課題を追究していくことで主体的・対話的で深い学びにつながると思う。

そこで、本研究は、公民的分野の学習において、他者と関わり、自分ごととして課題に向き合いながら、知識を獲得し、思考力・判断力・表現力を育む「やりくり」授業を継続的に実践し、生徒の変容をつかむことである。

本校の第3学年の生徒(132名)を対象に、公民的分野の学習がスタートする前に、図1のようなアンケートを行った。

大半の生徒が世界や日本のできごとに関心を持っていることから、社会的な事象への関心の高さがうかがえる。また、社会科を得意としている生徒と不得意としている生徒はおよそ半数ずつである。

2. 研究の方法

2.1. 対象と質問項目

鳥取大学附属中学校第3年生を対象とした。授業で継続的に非定型問題の学習を授業に取り入れ、「やりくり」授業の実践を積み重ねた。公民的分野の第4章「私たちの暮らしと経済」の学習を終えた1月に社会科に対する意識の変化や社会科で大事な力などに関する質問紙調査を行った。

質問紙調査における質問項目を表1に示す。

2.2. 授業実践

第3年生の授業で、公民的分野の第1章『現代社会と私たち』の1節「現代社会の特色と私たち」と第4章『私たちの暮らしと経済』の第2節「生産と労働」で実践した「やりくり」授業を紹介する。

2.3. 「やりくり」授業

「やりくり」授業は、生徒が自ら問題を解決していく文脈の設定およびそれに伴う既存の知識や技能、生活経験を駆使した思考活動が必要な学習である。新たな知識をあらかじめ与えてトレース

表1 質問項目

項目	質問
意識	1.社会科は得意になりましたか？
	2.社会のテストで記述式の問題は得意になりましたか？
	3.自分の考えを文章で表現することが好きになりましたか？
	4.自分の判断を求められる問いや学習課題に対して、答えることが好きになりましたか？
	5.正解のない問いや正解が1つでない問いに対して答えることが好きになりましたか？
他者との関わり	6.社会の授業においてグループで話し合う活動は好きになりましたか？
	7.グループで自分の考えを発表することができるようになりましたか？
	8.他者の考えを聞いて、自分の考えの参考にすることができるようになりましたか？
	9.他者と討議などをして、考えたり、答えを導き出したりすることが好きになりましたか？
社会科の力	10.社会科で大事な力はどんな力だと思いますか？

1～9の質問はそれぞれ6件法(「非常にあてはまる」、「あてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「どちらかというにあてはまらない」、「あてはまらない」、「まったくあてはまらない」)で回答させた。10の質問は、自由記述で回答させた。

させたり、反復練習させたりするような学習ではない(中尾, 2020)。そこで、本研究における授業実践では、学習課題を自分事としてとらえさせるために、身近な地域や自分たちの生活に大きく関わる学習課題を設定したり、外部機関が作成した体験的教材を活用したりした。また、自分の考えを広げ、深めるために、他者との意見交換などを多く取り入れ、他者の考えも参考にしながら、自分の考えを組み立て、さまざまな視点や角度から考えさせ、表現できるような「やりくり」授業を行う時間を設定した。

表2 単元計画

第1時	持続可能な社会に向けて
第2時	グローバル化
第3時	少子高齢化
第4時	情報化
第5時	現代の諸課題の解決に向けて

2.4. 「現代社会の特色と私たち」での実践

この単元は、公民的分野の最初の単元であり、現代社会に見られる特色と課題は日常生活だけでなく、政治・経済などの分野においても大きな影響を与え、現在の私たちの生活を深く結びつき、社会的な見方・考え方を働かせながら、課題を追求しやすい単元である。そこで、単元のまとめで、現在の日本の課題のオーバートーリズムに関して、身近な地域を取り上げ、自分の考えをまとめた。単元計画を表2に示す。

第5時「現代の諸課題の解決に向けて」(単元のまとめ)では、本時目標を「オーバートーリズム対策としての二重価格の是非を考えることを通して、持続可能な社会の在り方について、さまざまな角度から課題をとらえ、解決の方策をまとめることができる。」とした。第5時の授業の大まかな流れを、表3に示す。

第1時～第4時で学習した現代の日本の特色や課題を踏まえて、近年話題となっているオーバートーリズムを取り上げ、それに対する自分の考えをまとめさせた。学習課題を自分事としてとらえさせるために、鳥取砂丘、かろいち、三徳山といった生徒の生活圏内にある主な観光地を取り上げ、オーバートーリズム対策のとしての二重価格の是非を考えさせ、持続可能な社会の在り方について、自分の言葉でまとめさせた。

生徒にとって身近なもので課題を設定したことによって、生活体験などをもとにしたり、現状をふまえたりするなど、自分事として課題に取り組んでいる姿が見られた。

2.5. 「生産と労働」での実践

第4章『私たちの暮らしと経済』第2節「生産と労

表 3 第 5 時の授業の大まかな流れ

学習活動	○発問 ＊留意点など
現代の日本の特色をふりかえる。	＊政治や経済、国際関係に与える影響や課題と結び付けさせながら振り返らせる。
現在の日本が抱えている課題について考える。	＊オーバーツーリズムによる課題や海外の事例などを紹介する。 ○鳥取の観光地にオーバーツーリズム対策として二重価格を導入することに賛成か？反対か？ ＊身近な問題としてとらえさせるために、鳥取砂丘観光リフト、かろいちの海鮮丼、三徳山の入山料の二重価格案を提示し、他者と協働しながら自分の考えを組み立てさせる。
持続可能な社会の在り方について考える。	○オーバーツーリズム対策のどのように取り組むことが持続可能な観光につながるか？ ＊観光客を受け入れる側や観光客側の両方の視点や二重価格以外のアイデアなど具体的な考えを自分の言葉でまとめさせる。
単元のまとめをする。	＊次の単元やこれからの学習につなげる。

働」では、日本証券業協会が作成した『株式会社をつくろう』という体験的教材を活用した授業を行った。この教材では、挑戦状が生徒に向けて出され、それを解決していくというものである。毎時間、初めに DVD を視聴し、必要な知識を獲得してから、グループでの話し合いなどを通して、課題を解決していくという流れである。単元計画を表 4 に示す。

今回は生活班を利用したグループではなく、生徒にグループ編成を任せ、7〜8 グループで活動し

表 4 単元計画

第 1 時	魅力ある会社を企画せよ
第 2 時	資金を集めるための事業計画を立てよ
第 3 時	株式を発行して資金を集めよ
第 4 時	経済の動きを見極めよ

た。第 2・3 時には、グループごとに事業計画などをたて、プレゼンテーションシート(図 2)にまとめ、自分たちの会社の魅力が伝わるようにプレゼンテーションを行い、投資を呼びかけた。そして、どのグループの会社が魅力的だったかや将来性があるかなどをもとに投資を行った。投資という形で自分たちの計画や発表の成果が目に見える形であられ、生徒にとってもは達成感や充実感を味わえる体験となった。また、活動だけで終わるのではなく、知識定着のためのチェックシートがあり、これを授業のまとめとして行うことで、体験で得た学びを知識として定着することができた。

この単元の授業後の生徒の振り返りを図 3 に示す。

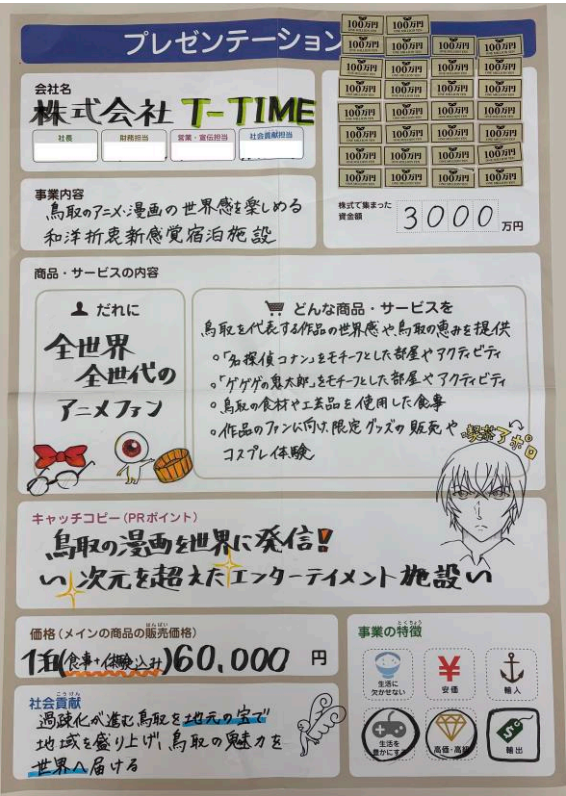


図 2 生徒が作成したプレゼンテーションシート

- ・体験をすることで教科書で学ぶよりも分かりやすかった。
- ・経済分野は、勉強だけでは絶対理解しきれなかったと思うので、体験を通して、考えながらできたので分かりやすかったです。
- ・最初にDVDを見て、基礎知識を知った上で活動したことで、反復することができ、知識をいつもより身につけやすかった。
- ・ビデオから先に知識を得ることで活動を活発に行いやすくなることができました。また、活動を行うことで自分事として考えられるようになり、利益を上げるにはどうすればよいのだろうと考えることでより理解が深まりました。
- ・学んだことを活かして、実際に班で活動することによってより深い学びにつながったと思います。
- ・自分たちで株式会社をつくって体験的に金融と経済について学習したことで遠い未来の話だと思っていたものがより身近に感じられ、深く頭に落とし込むことができた。
- ・今回の活動を通して、金融と経済の関わりについて深く理解できました。いつもだと内容をつかんで終わりのため理解が浅く終わってしまいます。でも、体験しながらの学習によって、今回は、仕組みの根元から理解できました。体験型の活動から、得られる学びは、より深いことが分かりました。

図3 生徒の振り返り

2.6. 分析の手続き

質問紙調査を行った3年生111名の回答を、6月に行ったアンケートと比較し、社会科に対する意識や他者との関わりについての変容を分析した。また、質問紙調査の10の質問の回答を、AIテキストマイニングを使用し、「やりくり」授業の実践との関連性を考察した。

3. 結果と考察

3.1. 質問紙調査の結果

質問紙調査の1～9の質問の結果を図4に示す。ほとんどの質問において、肯定的回答が7割を占め、否定的回答を大きく上回った。特に「社会の授業においてグループで話し合う活動は好きになりましたか?」、「グループで自分の考えを発表することができるようになりましたか?」、「他者の考えを聞いて、自分の考えの参考にすることができましたか?」という質問では肯定的回答がおおよそ9割をしめた。また、「社会のテストで記述式の問題は得意になりましたか?」という質問では、6月のアンケートでは否定的回答の割合の方が多かったが、質問紙調査では肯定的回答が大きく上回った。

質問紙調査の10の質問の回答のAIテキストマイニングの結果を図5に示す。2023年の4月に行ったアンケートでは、「社会科は暗記科目だ」と思っている生徒が88.4%をしめ、大半の生徒が社会的事象を覚えることが大事だと考えていた。AIテキストマイニングの結果では、「考える力」、「読み取る力」、「関連付ける力」などが多くあらわれた。

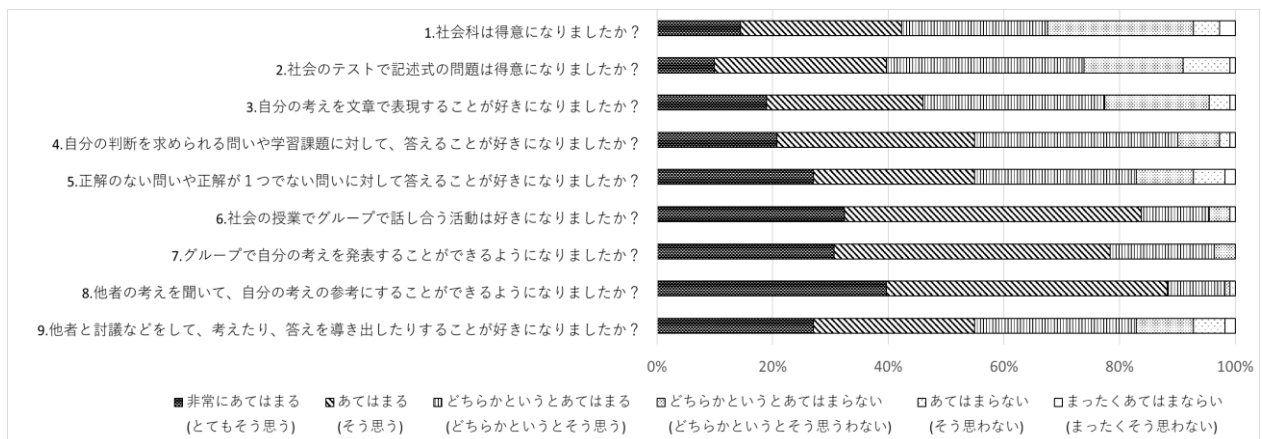


図4 質問紙調査の結果

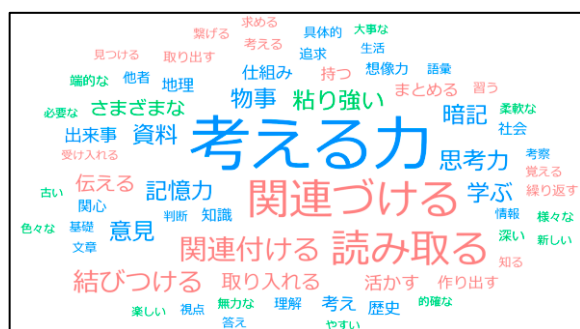


図 5 質問紙調査の AI テキストマイニングの結果

3.2. 「やりくり」授業が社会科の学びに対する意識の変容

社会科に対する意識に関する「社会科は得意になりましたか?」、「社会のテストで記述式の問題は得意になりましたか?」という質問では、強い肯定的回答は他の質問より割合が低かった。これは、「やりくり」授業で正解のない問いを考えることを積み重ねたが、テストの記述問題で、そのような問題を出題することができておらず、「やりくり」授業にあったテスト問題になっていないことが考えられる。また、社会科が苦手な生徒にとって、正解のない問いや答えが一つに定まらない問いを考えることに対して、何を基に考えればいいのか、考えるもとになる知識や生活体験などが乏しいのではないかと感じた。

他者との関わりに関する質問は、どの質問においても強い肯定的回答の割合が高くなった。これは、授業で個人探究の後に必ずペア・グループになって自分の考えを紹介したり、級友の考えを聞いたりする時間を設定し、授業を積み重ねた成果だと思う。また、ペア・グループ活動においては、学級の人間関係も影響すると考えられる。担任の先生を中心として、クラスの良い人間関係を構築するなど学級経営の成果でもありと考えられる。

正解がない問いや正解が一つに定まらない問いに対して、他者との関りを持たせながら、追究させる授業を積み重ねることで、他者の意見を聞きながら、自分の考えを構築できるようになり、そして「社会がわかり、得意になる」という社会科の意

識が変わるものになると考える。また、公民的分野の授業では、地理的分野や歴史的分野よりも日ごろの生活と深くかかわる事象が多い。学習課題も自分の身近なことに关する事柄を多く取り入れたことも他者との関わりや社会に対する意識の肯定的な変容が見られた一因となった。

「社会科で大事な力はどんな力だと思いますか?」という質問では、「考える力」、「関連付ける」、「読み取る」などが多くなったのも、ただ単に知識を教え込む授業ではなく、既習事項や生活体験などともに、自分で最適解を見つけ出し、他者との協働的な学びを深める「やりくり」授業を継続的に積み重ねた結果だと思われる。「暗記すること」も力として大事であるが、剥がれ落ちない知識を生徒につけさせるような授業が大切であると考え

4. まとめと今後の課題

今回の質問紙の調査で「やりくり」授業を継続的に積み重ねることで生徒にとってプラスの変容が見られた。他者と協働しながら、学習課題に取り組み、最適解を見出すことが大切になってくることがわかった。

今後は、「やりくり」授業を実践するだけでなく、生徒が主体的に学習に取り組み、興味関心を高められるように、発問に焦点をしばり、研究をすすめていきたい。

また、授業と評価の一体化をさらに進めていくことが今後の課題である。

参考文献

文部科学省(2018):中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説社会編, 東洋館出版社

中央教育審議会(2021):「令和の日本型学校教育」
の構築を目指して～全ての子供たちの可能性
を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び
の実現～(答申)、文部科学省

中尾尊洋(2020):学ぶ力を育む「やりくり」授業の提案－鳥取大学附属中学校の研究主題について－,鳥取大学附属中学校研究紀要,第 51 号, pp.3-6